生活に溶け込む「税の大切さ」を作文で表現

中学生の税に関する作文・全国54万通の中から選ばれた2人

全国納税貯蓄組合連合会および国税庁が主催する「中学生の税に関する作文」。全国7000校を超える中学校から過去最高の54万2889通の作品が寄せられ、その中から池本夢実さんの作文が総務大臣賞を、石原太勢君の作文が全国納税貯蓄組合連合会優秀賞に選ばれた。受賞した作文とインタビューの内容から、2人の税金に対する考え方を紹介する。

※原文は町HPでご覧になれます。

「人口8000人の山間地、川根本町に住むわたしは、夕方5キロのマラソンコースを走るのが日課だ―」の書き出しで始まる夢実さんの作文**「スクールバス」**。税金について考え始めたきっかけや納税者への感謝の心がつづられている。

夢実さんが暮らす平栗地区は、学校から遠く離れており、両親の送迎なしには通学するのが困難な地区だ。

「下校時など、一人で駅舎や公民館の軒先で親を待つことが多く、そのたびに寂しい思いをしていました。

ある日父親が話した「平栗にスクールバスが走るかもしれない」という言葉にとても喜んだ夢実さん。

「スクールバスが平栗まで来れば、両親の負担は減り、自分も寂しい思いをしなくて済みます。でも、そのとき母が言ったんです。『この地区の子ども2人のために、税金を使ってもいいのかな』って」。

その言葉は、夢実さんが税金について深く考えるきっかけとなった。

「両親に教えてもらい、わたしたちの暮らしや学校生活は税金によって支えられていることを初めて知りました」。

それから1カ月経ったころ、スクールバスの話は実現した。そのときの心境を夢実さんはこう振り返る。

「この町の大人が子どものことをどれだけ大切に思ってくれているか伝わってきて、言い表せないくらいうれしかったです。今まで当り前のように学校教材を使い、地域の行事を楽しんでいましたが、これは本当は税金のおかげ、そして税金を払っている人たちのおかげなんだと思うようになりました」。

あれから3年、感謝の気持ちは今も夢実さんの心にある。「通学が楽になった分、勉強や運動に力を注げるようになりました。あのころたった2人だけを乗せていたスクールバスは、地域のお年寄りも乗れるようになりました。放課後児童クラブが始まり、両親共働きで寂しい思いをする子も減りました。税金が多くの人のために使われていることが分かり、とてもうれしくなりました」。

夢実さんは最後にこう訴えかける。

「税金を払っているのだからサービスを受けるのは当然という声を耳にしますが、この当然と思う気持ちを感謝する心に切り換えてみてはどうでしょうか。きっとこれまで以上に、税は大切に有効に使われると思います。両親が教えてくれた納税者への感謝の気持ちと工夫して使う努力を、未来を担うわたしたちが実践していかなくてはなりません」。

「医療と税金」という題名の石原太勢君の作文。この町の住民にとって切実な問題である「地域医療」について、太勢君の考えが述べられている。

生前やさしかった祖父が肺の病で倒れたとき、自宅から50キロ離れた島田市民病院に入院することになった。

「祖父は入院中、長い時間をかけて見舞いに来る僕たちを気遣って『もういいで早く帰るさ。気を付けて帰れよ』と、自分のことよりも僕たちの心配をしてくれていたことを思い出します」。

大きな病院がない川根本町の現実を太勢くんはあらためて考えた。

「僕はよく、町内に大きな病院があればなあ…と考えます。大きな病気にかかったとき、どうしても静岡市や島田市まで通うことになり、高齢者が多い本町にとって、大きな負担になっています。

子どもが困ったときに頼れるのが親であるように、高齢者が困ったときに頼れるのが医療機関なんだと思います。しかし残念ながら、川根本町の実態は、町民にとって安心して頼れる存在にはなっていないと思うんです」。

太勢君は税金の使い道について「国民の命を守ること」を最優先に考えてほしいと提案する。「道路を広げたり、新幹線や新しい文化施設を建設することも必要です。でも今、病気で苦しんでいる人や不自由な体で困っている人、不安を抱いている人を助けることの方が、もっと大事だと僕は思います。特にこれまで、この国や町を支えてくれた高齢者の人たちが、笑って楽しく過ごせるような地域づくりを、これからしていかなければならないと思います」。

2人の作文から、わたしたちが学ぶべきことがたくさんある。

池本夢実さん

Ikemoto Yumemi

総務大臣賞

平栗・本川根中1年

石原太勢君

Ishihara Taisei

全国納税貯蓄組合連合会優秀賞

崎平・本川根中3年